

貧困女性の貯蓄・消費行動とジェンダー —バングラデシュ・グラミン銀行の事例—

坪井 ひろみ*

はじめに

バングラデシュでは、世帯における家計の主体は男性であり、消費行動の目に見える主体も男性であるといわれている。大きな買い物はもちろんのこと、食料品、日用品、衣類、そして女性の必需品でさえも、男性が買い物の責任を負うとされているからである。このことから、バングラデシュ政府の家計統計や農村家計調査の多くが、主に男性の購買行動による家計の貯蓄・消費を表しており、女性の「お金」にまつわる行動が外にあまり見えない故に、女性への関心が低い。

こうした状況において、バングラデシュの代表的な農村開発プログラムであるマイクロクレジットの実施は、貧困女性のお金にまつわる行動に人びとの注目を集めることとなった。しかしながら、マイクロクレジットという呼称は、融資の側面を強調することとなり、それに関する研究の蓄積をもたらしたものの、もう1つの重要な側面である貯蓄については、その重要性が叫ばれる程には研究がなされていない。

マイクロクレジット機関の先駆けであり、およそ30年の歴史を持つグラミン銀行についても例外ではない。グラミン銀行の貯蓄の側面が注視され始めたのは、「グラミン総合的システム」が導入されグラミン銀行Ⅱ⁽¹⁾として新たな業務を展開した2002年頃からである。それ以前のシステム（今日では、グラミン・クラシック・システムと呼ばれる）において、貯蓄の仕組みがなかったわけではない。その仕組み「グループ基金」は、グラミン銀行設立当初から廃止に至る2001年6月まで存在していた。しかしながら、グループ基金は、積立を義務づけた言わば強制貯蓄であったためであろうか、これまで簡単に紹介されている程度にすぎない。融資の側面に関する膨大な研究に比べ、貯蓄の側面に関するそれはあまりにも少ないのが現状である。

本稿の目的は、貯蓄訓練期ともいえるグループ基金の時代を経験した女性メンバーたちの、貯蓄と消費に対する意識と行動を明らかにし、グループ基金が彼女たちに与えた影響を考察することである。このことは、バングラデシュにおいて広く普及している強制貯蓄の意義を考察することでもある。以下、第1節では、1983年度版から2000年度版までのすべての『グラミン銀行年次報告書』に基づき、グループ基金を概観し、男性メンバーと女性メンバーとの消費行動における違いを示す。次に第2節では、筆者の調査に基づきグループ基金の実態を明らかにし、第3節で女性メンバーの貯蓄と消費に対する意識と行動を示す。最後に、結論を述べる。

1. グループ基金の概要

(1) 仕組み

1976年、グラミン銀行は小規模なパイロット・プロジェクトとして出発したが、その段階からグラミン銀行のメンバーに貯蓄を義務づけてきた。この貯蓄は、メンバーが所属する5人グループの「グループ基金」に積み立てられ、グループによって管理されていた。以下、これまでに紹介されているグループ基金の仕組みについて整理する（Hossain 1988: 33-34；Fuglesang and Chandler 1993: 103-104；Gibbons 1994: 141-143；Khandker, Khalidy and Khan 1996: 39-40；Yunus and Jolis 1998: 109）。

グループ基金は、緊急に少額が必要な時、従来のように金貸しに頼らずに済むよう、メンバーを保

* つばい ひろみ、秋田大学工学資源学部助教授

護する目的で設けられた。そのため、使途に制限はない。グループ基金の原資は(1)メンバーが、グラミン銀行の正式なメンバーとなるための必須講習の際に納めた金額、(2)毎週開催される集会で納める少額の積立金、(3)融資を受ける際に融資額から天引きされる5%の額(グループ税と呼ばれる)、(4)5人グループが独自に定めた規則があれば、それに反した際の罰金^②、(5)グループ基金に預けた貯蓄に対してグラミン銀行が年8.5%で支払う利子、から成り立っている。なお、グループを脱退する者には(2)が払い戻される。

次に、メンバーがグループ基金から融資を受ける際の手続きをみる。融資はグループ全員の同意を必要とし、1件当たりの限度額、および返済期間あるいは返済方法などの条件については、行員も出席する会合において、グループメンバーの話し合いで決定される。ただし、返済は無利子が一般的であり、融資の総額は原則的に各グループ基金の残高の50%が上限である。

(2) 「グループ基金」の貯蓄と融資

1983年度版から2000年度版までの『グラミン銀行年次報告書』を基に、グループ基金の全体像を筆者の計算によりとらえる。各年度版には、統計からみたグラミン銀行の歴史が記載されており、最も古いデータは、1976年から発表されている。

グループ基金の累積貯蓄額は、1983年から2000年までの18年間で700倍となり、2000年末現在、113億タカである。メンバー1人当たりの貯蓄額は17倍となり、2000年末現在、4,734タカである。また、2000年末現在の積立金は、週5タカである。グループ基金からの累積融資件数は、2000年末現在437万件であり、18年間でメンバーの21%(男性23%、女性21%)により利用されている。累積融資額は、2000年末現在65億タカで、累積貯蓄額の58%を占めている。1件当たりの融資額は18年間で6倍となり、平均1,487タカである。

(3) 分類別融資目的

グループ基金からの融資は目的を問わない。筆者の調査によると、融資目的は1983年は202項目であったが、2000年には353項目となり、選択肢は75%拡大している。グラミン銀行はこうした300以上もある融資目的を大きく9つに分類している^③。

表1は、1976年から2000年末現在までの累積の融資を、融資目的別に9つに分類したものである。累積融資件数437万件のうち、男性メンバーが35万件(8%)、女性メンバーが402万件(92%)である。また、累積融資総額65億タカのうち、男性メンバーの融資額は6億2,000万タカ(9.5%)、女性メンバーが58億8,000万タカ(90.5%)である。この比率は、グラミン銀行のメンバーの構成比とほぼ対応する。1件当たりの融資額は、男性メンバーは1,768タカ、女性メンバーは1,462タカで、男性メンバーの融資額は女性メンバーより20%高い。

表1 累積融資件数および累積融資額の割合(1976—2000年)

(%)

	累積融資件数			累積融資額		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性
①保健医療	24.4	9.4	25.7	24.8	11.1	26.3
②世帯の入用	30.8	25.5	31.3	29.9	23.3	30.6
③事業資金	34.7	40.0	34.2	33.7	43.3	32.7
④原材料購入	1.3	3.8	1.1	1.3	2.0	1.2
⑤事業用補修	1.7	4.9	1.4	3.4	5.5	3.2
⑥農業	3.7	7.4	3.4	3.3	5.4	3.1
⑦仕入れ	1.8	4.8	1.5	1.7	3.5	1.5

⑧共同事業	0.9	3.1	0.8	0.9	4.9	0.5
⑨ローン返済	0.7	1.1	0.6	1.0	1.0	0.9
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
累積件数(件)	4,370,869	352,801	4,018,067	—	—	—
累積融資額(タカ)	—	—	—	6,499,728,693	623,903,222	5,875,825,471

出典) Grameen Bank, *Annual Report 1998: 24; Annual Report 1999: 34; Annual Report 2000: 34* より筆者作成。

グラミン銀行は融資目的を9分類しているが、筆者は9分類を2つに大別した。それは、「生活の質に直接かかわること」、および「経済活動にかかわること」の2つである。表1の①と②は前者に、③から⑨までは後者に分類される。大別した2つの融資件数を比較すると、全体では55対45であり、男性メンバーは35対65、女性メンバーは57対43である。このことから、男性メンバーは、所得向上に直接結びつく活動に資金を投入し、女性メンバーは、生活の質を直接向上させる活動に資金を利用しているといえる。しかし、女性メンバーは経済活動にかかわることにも43%の資金を投入しており、マイクロクレジットの借り手として、所得向上を目指す姿勢が窺われる。このことは、女性の「生活の質に直接かかわること」に関する融資項目数が1983年から1997年の間に48から66へと38%増加したのに対し、「経済活動にかかわること」の融資項目数は154から287へと86%増加していることにも表れている。

2. 調査からみたグループ基金の実態

(1) 調査の概要

グループ基金にかかわる実態についての調査研究は皆無であるため、グラミン銀行の女性メンバーに対し、筆者は質問紙に基づく面接聞き取り調査⁴⁾を2003年2月から3月に実施した。調査対象者は、グラミン銀行のジョブラハタザリ支店(チッタゴン県)、パシオンガジプール支店(ガジプール県)、ドッキンカンウットラ支店(ダッカ県)、モドンプールバンドル支店(ナラヤンガンジ県)の管轄内にある村に住む、女性メンバー160人である。

4県にある4支店は大都市に比較的近く、調査村では電気が通っている世帯が数多くあった。また、共同の井戸も設置されていた。しかし、支店間あるいは同一支店内において地域差が認められたため、筆者は各支店の支店長および一般行員に対し、調査村を豊かな地域と貧しい地域に分類するよう依頼した。彼らはグラミン銀行が持つ独自の「脱貧困基準⁵⁾」を用いて、その到達度から調査村を分類した。その結果、貧しい地域として、モドンプールバンドル支店の全調査村およびドッキンカンウットラ支店の調査村の一部が選定された。前者は、支店より徒歩30分の距離にあり、漁業の盛んな集落である。集落には多くの池があり、女性と子どもが魚を捕る姿を多く見かけた。後者は、支店より車で30分の距離にあり、洪水の度に陸の孤島となる集落である。2002年末、ようやく盛り土された道路がほぼ完成したばかりである。これら以外の調査村はすべて豊かな地域とされた。

(2) 分析手法

分析手法は、調査対象者を地域差とグループ基金の借り手・非借り手で分類し、さらにそれらを組み合わせるものである。グループ化は以下の通りである。(1)グループA: 貧しい地域に住むグラミン銀行のメンバー(75人)、(2)グループB: 豊かな地域に住むグラミン銀行のメンバー(85人)、(3)グループ1: グラミン銀行のメンバーでグループ基金から融資を受けた人(60人)、(4)グループ2: グラミン銀行のメンバーでグループ基金から融資を受けなかった人(100人)、(5)グループA1: 貧しい地域に住むグラミン銀行のメンバーで、グループ基金から融資を受けた人(35人)、(6)グループA2: 貧しい地域に住むグラミン銀行のメンバーで、グループ基金から融資を受けなかった人(40人)、(7)グループB1: 豊かな地域に住むグラミン銀行のメンバーで、グループ基金から融資を受けた人(25

人)、(8)グループB 2：豊かな地域に住むグラミン銀行のメンバーで、グループ基金から融資を受けなかった人(60人)、である。これら8つのグループを、図1のように対比し分析する。

図1 調査対象者のグループ別対比図

		融資を受けた			
貧しい地域	グループ	グループ	グループ	グループ	豊かな地域
	A 1 (35)	A 2 (40)	B 1 (25)	B 2 (60)	
		融資を受けなかった			

注) 数字は調査対象者数を表す。

出典) 筆者作成

(3) 調査対象者の属性

表2をみると、年齢についてはグループ1の方がグループ2より若干高く、グループ基金から融資を受けた人は、グループA1が35人、グループB1が25人であることから、貧しい地域に多くいることがわかる。就学年数については平均2.6年と短く、無就学および就学年数が1-5年(初等教育程度)の人が80%を占めている。こうした状況にあっても、グループBには就学年数が6-12年の中等教育経験者が30%弱いる。そして、彼女たちの配偶者もグループAの配偶者より就学年数が長い。これら以外の世帯規模や世帯の稼ぎ手数については、違いがほとんどみられない。

表2 調査対象者の属性

	対象者 (人)	年齢 平均 (歳)	就 学 年 数				世帯 規模 平均 (人)	世帯 の稼 ぎ手 平均 (人)	配偶 者 年齢 平均 (歳)	配偶 者 就学 年数 平均 (年)
			平均 (年)	無就学 (人 (%))	1-5年 (人 (%))	6-12 年 (人 (%))				
グループA1	35	36.1	1.7	22 (63)	11 (31)	2 (6)	4.3	2.4	43.0	2.9
グループA2	40	30.6	2.3	25 (63)	8 (20)	7 (17)	4.0	2.4	38.6	3.7
グループB1	25	40.4	3.0	13 (52)	6 (24)	6 (24)	4.1	2.7	45.1	6.1
グループB2	60	35.0	3.5	28 (47)	15 (25)	17 (28)	4.1	2.3	40.8	4.0
	160	35.0	2.6	88 (55)	40 (25)	32 (20)	4.1	2.4	41.3	4.0

出典) 筆者作成

次に、調査対象者(女性)の主な職業は、牛・家禽の飼育が最も多く、全体の40%を占めている。続いて多いのがグループAは漁業、グループBは農業で、この点が大きく異なる。そして、商店経営、手工芸と続く。一方、世帯主(男性)の主な職業⁶⁾は、売買や商店経営、リキシャ引きなどに代表される非農業部門が大部分を占め、農・漁・畜産業は15%にすぎない。グループBに占める農業の割合(19%)がグループA(9%)より10ポイント高いことを除けば、全体的に職業に関してはグループ間の差異は小さい。

(4) 融資の現状と消費行動

グループ基金から融資を受けた人の割合は、全調査対象者の 37.5%を占め、そのうち、グループ A 1 はグループ A の 50%弱、グループ B 1 はグループ B の 30%である (表 2 参照)。また、1 人が今まで受けた融資回数は、グループ A 1 が 1.6 回、グループ B 1 が 2.8 回である。次に、グループ基金から最後に受けた融資について表 3 に整理する。

表 3 グループ基金から最後に受けた融資

使 途	全 体			グループ A 1			グループ B 1		
	件数	融資額 (タカ)	1 件当 たりの 融資額 (タカ)	件数	融資額 (タカ)	1 件当 たりの 融資額 (タカ)	件数	融資額 (タカ)	1 件当 たりの 融資額 (タカ)
①治療費	19	36,500	1,921	11	19,000	1,727	8	17,500	2,188
②教育費	16	26,500	1,659	13	21,000	1,615	3	5,500	1,833
③住宅費	7	26,500	3,786	3	6,500	2,167	4	20,000	5,000
④イード(祭り)	1	1,500	1,500	0	0	0	1	1,500	1,500
資金	8	27,000	3,375	4	11,500	2,875	4	15,500	3,875
⑤事業投資	5	8,500	1,700	2	3,500	1,750	3	5,000	1,667
⑥家畜購入	2	13,000	6,500	0	0	0	2	13,000	6,500
⑦海外渡航費	1	3,000	3,000	0	0	0	1	3,000	3,000
⑧水田購入	1	2,000	2,000	0	2,000	2,000	1	0	0
⑨化学肥料購入	1	2,000	2,000	1	0	0	0	2,000	2,000
⑩小作料	1	3,500	3,500	1	3500	3,500	0	0	0
⑪ローン返済	1	10,000	10,000	0	0	0	1	10,000	10,000
⑫金の購入									
	63	160,000	2,540	35	67,000	1,914	28	93,000	3,321

出典) 筆者作成

まず、1 件当たりの融資額は平均 2,540 タカであるが、グループ B 1 はグループ A 1 よりも 1,400 タカ多い 3,300 タカである。上述のように、1 人が今まで受けた融資回数はグループ B 1 の方が多いため、高額な融資を再三受けている人は、グループ B 1 に多いといえることができる。

次に、融資の用途は 12 項目ある。これらを、「生活の質に直接かかわること」および「経済活動にかかわること」の 2 つに大別して、開発の程度をみることにする。このことは、人は生活の基礎的な部分を充足させた次の段階で経済活動へ資金を投入するだろう、と考えることで可能であると思われる。12 項目は、生活の質に直接かかわることには表 3 の①から④が、経済活動にかかわることには表 3 の⑤から⑫が分類されよう。前者と後者の割合を比較すると、まず件数では、グループ A 1 は 8 対 2、グループ B 1 は 6 対 4 となり、次に融資額では、グループ A 1 は 7 対 3、グループ B 1 は 1 対 1 となる。つまり、グループ A 1 はグループ B 1 より、生活の基礎的な部分の充足のためにより多くを費やしており、開発の次の段階である経済活動に費やす部分はグループ B 1 より少ない。したがって、経済活動により多くを費やしているグループ B 1 の方がグループ A 1 より生活水準が高いと考えることができ、このことは、グラミン銀行の「脱貧困基準」に基づいた分類 (豊かな地域はグループ B、貧しい地域はグループ A) とも合致している。

3. 貯蓄と消費に対する意識と行動

(1) 貯蓄に対する意識と行動

調査対象者に対し、グラミン銀行に加入する前の貯蓄に対する意識と貯蓄経験を尋ねた。それらを整理したものが表 4 である。まず、貯蓄に対する意識については、全体の 75%が「重要ではない」と認識しており、グループ間における差はあまりない。貯蓄経験においても、90%弱が「全く経験がない」と答えている。貯蓄経験のなさは、とりわけグループ A 1 に顕著であり、ほぼ全員が貯蓄を体験していない。こうした行動の背景として、「自分のお金を持ったことがない」、「お金を貯めるなど思いもよらなかった」、「お金を保管する場所すらなかった」といった回答があった。しかし、グラミン銀行に加入し、グループ基金に少額を積み立てていくという経験を経て、貯蓄に対する意識は大きく変化している。すなわち、全員が貯蓄の重要性を認めており、また、たとえグラミン銀行から融資を受けなくてもグラミン銀行への貯蓄だけは続けたい、と多くの調査対象者（147名：92%）が答えている。このことは、貯蓄に対する意欲の高まりを表していると考えられる。

表 4 貯蓄の重要性と貯蓄経験

	(質問)グラミン銀行に入る前に貯蓄は重要だと思っていましたか。(人(%))				(質問)グラミン銀行に入る前に貯蓄をしたことがありましたか。(人(%))			
	とても重要	重要	あまり重要でない	全く重要でない	よくしていた	時々していた	めったになかった	全くしなかった
グループ A 1	2(5.7)	7(20.0)	0	26(74.3)	0	1(2.9)	0	34(97.1)
グループ A 2	5(17.5)	7(17.5)	0	28(70.0)	0	9(22.5)	0	31(77.5)
グループ B 1	3(12.0)	5(20.0)	1(4.0)	16(64.0)	0	3(12.0)	0	22(88.0)
グループ B 2	2(3.3)	10(16.7)	0	48(80.0)	0	7(11.7)	0	53(88.3)
全体	12(7.5)	29(18.1)	1(0.6)	118(73.8)	0	20(12.5)	0	140(87.5)

出典) 筆者作成

そこで、質問紙にはなかったが、調査時点における個人の貯蓄額を尋ねてみた。143 人から寄せられた回答を表 5 に示す。貯蓄額は 6,000－10,000 タカが最も多く、半数以上を占めている。最高額は 35,000 タカ、最低額は 500 タカであり、貯蓄額はメンバー歴が長い人ほど多い傾向にある。しかし、個人貯蓄口座への移行後、メンバー歴の長短にかかわらず、とりわけ貯蓄に熱心なメンバーが現れ始めている⁷⁾。彼女たちは、市場で魚を買い付け売りさばく、牛乳を売り毎月 10,000 タカを稼ぐ、副業として見合いを斡旋し成功報酬を得るなど、経済活動に対してきわめて積極的である。

次に、貯蓄額の平均をみると、全体では 8,888 タカである。各グループのなかで最も貯蓄が多いのはグループ A 1 であり、最も少ないグループ A 2 の 1.5 倍の貯蓄額である。グループ A 1 は表 4 で示したように、グラミン銀行に加入する前に貯蓄をしたことがほとんどなかったグループである。したがって、グループ基金を通して貯蓄経験を積んだ結果、調査対象者の貯蓄への関心は上述のように高められているが⁸⁾、そのなかにおいて、グループ基金はグループ A 1 に最も影響を与えたということができよう。貧しい地域に住む貯蓄経験のほとんどなかったグループ A 1 が、なぜ貯蓄額が最も高いのかは興味深い分析対象である⁹⁾。

表 5 調査対象者の貯蓄額

(人 (%))

	平均 (タカ)	500－ 5,000 タカ	5,001－ 10,000 タカ	10,001－ 15,000 タカ	15,001－ 20,000 タカ	20,001－ 25,000 タカ	25,001－ 30,000 タカ	30,001－ 35,000 タカ	計
グループ A 1	10,500	3(8.5)	19(54.3)	7(20.0)	4(11.4)	1(2.9)	1(2.9)	0	35(100)

グループA 2	6,875	11(27.5)	21(52.5)	4(10.0)	4(10.0)	0	0	0	40(100)
グループB 1	9,167	0	9(75.0)	2(16.7)	1(8.3)	0	0	0	12(100)
グループB 2	9,259	12(21.4)	29(51.8)	11(19.6)	3(5.4)	0	0	1(1.8)	56(100)
全体	8,888	26(18.2)	78(54.5)	24(16.8)	12(8.4)	1(0.7)	1(0.7)	1(0.7)	143(100)

出典) 筆者作成

(2) 消費に対する意識と行動

バングラデシュは家父長的な社会であり、世帯主である男性が家庭内における意思決定者である。そして、冒頭で述べたように買い物に関して責任を負っている。家父長的な社会で暮らす女性に対しては、バリと呼ばれる家の垣根の中で生活し、バリの外で何かをしたいのであれば、その都度、夫あるいは父から許可を得るべきであり、もし外出するのであれば、ブルカでほぼ全身を覆い、男性の親族からエスコートされて出かけるべきである、という社会規範がある⁽¹⁰⁾。今日では、ブルカ着用は厳格に守られている地域とある程度守られている地域があり⁽¹¹⁾、外観からは外出に関する社会規範の変化が窺われるものの、依然として、バリの外で女性が自由に行動することには限界があるようである。

このような社会において、とりわけ貧困女性が1人で日常の買い物に行く、あるいは女性にとって最も高価で貴重なサリーを自分の意思で買うという行動は、女性にそうすることが「任されている」ことであり、したがって、家庭内における意思決定参加に強いかかわりを持っていると考えられるのではないだろうか。もし日常の買い物やサリー購入が、男性である夫の意に反しての行動であるならば、夫が3回離婚すると唱えるだけで妻との離婚が成立するといわれるほど夫側からの離婚が容易な社会において、女性が妻として家庭に留まることは難しいであろう。離婚という手続きを踏まずに夫から遺棄されることも、大いにあり得ることである。

以上のような考えから、自分で自由に使えるお金を持っていると回答した調査対象者(160人)の買い物への対処の仕方から、家庭内における女性の決定権の強弱を測ってみたい。

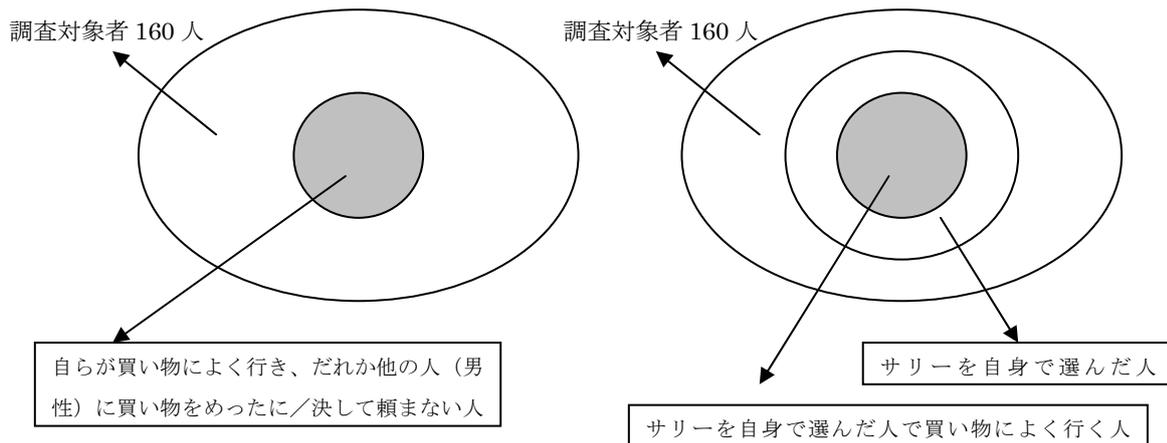
調査対象者に対して3つの質問をした。第1は、自らが常設市や定期市に出向くかどうか、第2は、買いたい物があるときだれかに頼むかどうか、そして第3は、一番新しいサリーを自ら選んだかどうか、である⁽¹²⁾。

これらに対する回答を整理すると、第1の質問については、買い物に「行かない」人は13.1%、「よく行く」人は31.9%であり、「ときどき行く」人が55.0%を占めている(付表1、質問Aの回答参照)。第2のだれに頼むかの質問については、買い物に「行かない」人はだれかに「頼み」(12.5%)、「ときどき行く」人はだれかに「ときどき頼む」場合が多い(55.0%)。買い物に「よく行く」人はだれか他の人に「頼まない」(22.5%)傾向にある(付表1、質問AとBの回答を参照)。つまり、他の人に頼まず1人で買い物に行く人が22.5%いるということである。なお、依頼相手はすべて男性の親族であり、夫(78%)、息子(20%)、兄弟(1%)、義父(1%)であった。

次に、サリー購入からみてみよう(付表2参照)。サリーに関する質問は、「はい/いいえ」の2択であった。しかし、面接調査中に63人(40%)が、夫あるいは息子と一緒にサリーを買いに行き相談して決定した、と答えた。この「相談」において、最終決定の場に調査対象者が居合わせたことは確かだが、彼女の意思がどの程度反映されたかは定かではないため、自らの意思で「選んだ」と答えた57人についてのみ、日常の買い物行動との関係を見ることにする(付表3参照)。サリーを自らの意思で選んだ57人のうち、買い物に「よく行く」人は36人であった。これは全調査対象者の22.5%に当たる。

以上の買い物行動をまとめた図2は、調査対象者である女性のほぼ4人に1人が家庭内において相対的に強い決定権を持っていることを示唆していると考えられる。

図2 調査対象者の買い物行動



出典) 筆者作成

おわりに

本稿は、グラミン銀行「グループ基金」を通して、女性メンバーの貯蓄・消費行動をとらえ、グループ基金が女性メンバーに及ぼした影響を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが示唆された。

まず、『グラミン銀行年次報告書』に記載されている 430 万件の融資目的から、女性メンバーは生活の質的向上に、男性メンバーは所得向上により多くの資金を投入していたことである。次に、筆者の調査から、(1)グラミン銀行の女性メンバーでグループ基金から融資を受けた人は、貧しい地域に多くいたこと、(2)グラミン銀行の女性メンバーでグループ基金から融資を受けた人が投入する生活向上のための資金比率は、貧しい人ほど高く、豊かな人ほど低かったこと、(3)グラミン銀行の女性メンバーは、グラミン銀行への加入後、貯蓄の重要性を認識し、貯蓄意欲がきわめて高くなっており、最も変化が大きかったのは、貧しい地域に住むグループ基金から融資を受けた人であったこと、そして、(4)グラミン銀行の女性メンバーは、4人に1人が家庭内において相対的に強い決定権を持っているといえることである。

以上から、グループ基金はグループ単位の強制的な貯蓄であったため、貯蓄経験のない人にも貯蓄習慣を容易に身につけさせ、不確実性の低下に貢献した。グラミン銀行の女性メンバーは、グループ基金を通して自分の意思で使える資金を獲得し、それを利用することで選択肢を増やし、さらに、自らと家族の生活の安定を図っていた。グループ基金は総じて家庭生活の安定に寄与しており、とりわけ、グラミン銀行のメンバーの中でも貧しい女性メンバーほどより大きな影響を受けたことが窺われる。

[付記]

本稿は、2004年3月、山口大学大学院東アジア研究科に提出された筆者の博士論文の一部を加筆・修正したものである。

[注]

1. グラミン銀行の新システムの特徴は、(1)融資を一本化したこと、(2)グループ基金を廃止し、かわりに自由度の高い貯蓄システムとなったこと、(3)最貧困層の加入を奨励していること、である (Yunus, 2002)。
2. 2000年に行った筆者の調査によると、一部のグループは、「集会に遅れた場合は罰金として10タカをグループ基金に納める」という規則を設けていた。
3. グラミン銀行設立年の1983年は、融資目的は8つに分類されており、共同事業は入っていない。共同事業が融資目的としてあげられたのは、翌1983年からである。
4. 質問紙を作成するにあたり、シャプラニール=市民による海外協力の会(2002)を参照した。
5. グラミン銀行の「脱貧困基準」とは、トタン屋根のある家を持つ、家族全員にベッドがある、安全な飲み水が手に入る、衛生的なトイレを持つ、子ども全員が学校に通える、蚊帳がある、収入を得られる機会を持つ、など

である (Grameen Trust, 1998: 1-2)。

6. 調査対象者（女性）自身が世帯主である人が 5 人いたが、彼女たちの主な職業は世帯主の主な職業ではなく調査対象者の主な職業に含まれている。
7. グループ基金の収支は黄色い一冊の通帳（グループ貯蓄口座）に記入され、グループ長がそれを管理していたため、5 人グループの他のメンバーが通帳を見る機会がほとんどなく、グループ基金からの融資可能額を把握することが困難な場合があった。さらに、個人の貯蓄額の確認も難しい場合があった。しかし、個人貯蓄口座に移行したことでそうした問題点が解決され、利便性が増している。そうしたことが貯蓄促進の要因の 1 つとなり、貯蓄にとりわけ熱心なメンバーを生み出したのではなかろうかと考えられる。
8. グラミン銀行に加入する前、貯蓄は重要ではないと考えていた人が 75%いたが（表 4 参照）、調査時点では全員が貯蓄の重要性を認識していた。
9. 今回の調査では、グラミン銀行への貯蓄以外の世帯資産のすべてを把握していないため、その要因を説明することは難しい。しかし、グループ A 1 は最も影響を受けたからこそ、資産を分散させるよりグラミン銀行に貯蓄という形で集中させる方がリスクは少ないと判断した、と考えることができるのではないだろうか。
10. 外川（1993: 43-45）およびバングラデシュ女性・児童省（1998: 26-29）を参照した。
11. 今回の調査地であるジョブラハタザリ支店近辺では、ほぼすべての女性がブルカを着用して外出していた。その他の調査地域では、ジョブラハタザリ支店近辺ほどではないが、ブルカ着用の女性を見かけた。
12. 3 つの質問に対する回答を付表 1、2、3 に示す。

付表 1 質問 A および質問 B

(質問 A) あなたは常設市や定期市に行きますか。(よく行く、ときどき行く、めったに行かない、決して行かない)								
(質問 B) あなたは買いたいものがあるとき、だれかに頼みますか。(よく頼む、ときどき頼む、めったに頼まない、決して頼まない)								
	1	2	3	4	5	6	7	(人(%))
質問 A の回答	決して行かない	めったに行かない	めったに行かない	ときどき行く	よく行く	よく行く	よく行く	
質問 B の回答	よく頼む	よく頼む	めったに頼まない	ときどき頼む	ときどき頼む	めったに頼まない	決して頼まない	計
グループ A 1	0	2(5.7)	0	22(62.9)	5(14.3)	6(17.1)	0	35(100)
グループ A 2	0	2(5.0)	1(2.5)	26(65.0)	2(5.0)	9(22.5)	0	40(100)
グループ B 1	2(8.0)	0	0	14(56.0)	3(12.0)	5(20.0)	1(4.0)	25(100)
グループ B 2	1(1.7)	13(21.7)	0	26(43.3)	5(8.3)	10(16.7)	5(8.3)	60(100)
全体	3(1.88)	17(10.63)	1(0.62)	88(55.00)	15(9.37)	30(18.75)	6(3.75)	160(100.00)

出典) 筆者作成

付表 2 質問 C

(質問 C) 一番新しいサリーをあなた自身で選びましたか。(はい、いいえ)					
(人(%))					
質問 C の回答	はい選んだ	いいえ選ばなかった	夫と一緒に選んだ	息子と一緒に選んだ	計
グループ A 1	12(34.3)	8(22.9)	13(37.1)	2(5.7)	35(100)
グループ A 2	13(32.5)	4(10.0)	23(57.5)	0	40(100)
グループ B 1	7(25.0)	10(40.0)	8(32.0)	0	25(100)
グループ B 2	25(41.7)	18(30.0)	17(28.3)	0	60(100)
全体	57(35.63)	40(25.00)	61(38.13)	2(1.24)	160(100.00)

出典) 筆者作成

付表 3 サリーを自ら選んだ人と日常の買い物(質問 A) との関係

(人(%))

	よく行く	ときどき行く	めったに行かない	決して行かない	計
グループA 1	8(66.7)	4(33.3)	0	0	12(100)
グループA 2	6(46.2)	6(46.2)	1(7.6)	0	13(100)
グループB 1	4(57.1)	2(28.6)	0	1(14.3)	7(100)
グループB 2	18(72.0)	5(20.0)	2(8.0)	0	25(100)
全体	36(63.16)	17(29.82)	3(5.26)	1(1.76)	57(100.00)

出典) 筆者作成

[引用・参考文献]

- シャブラニール=市民による海外協力の会 (2002) 『バングラデシュ「農村開発信用事業(グラミン銀行)事後評価調査最終報告書』、国際協力銀行委託調査。
- 坪井ひろみ (2004) 『グラミン銀行の社会開発における役割に関する研究』山口大学大学院東アジア研究科博士論文 (未出版)。
- 外川昌彦 (1993) 「人々の生活とイスラム」 白田雅之・佐藤宏・谷口晋吉編『もっと知りたいバングラデシュ』、弘文堂、43-45。
- バングラデシュ女性・児童省 ((財) アジア女性交流・研究フォーラム訳) 『バングラデシュの女性: アジア女性シリーズ No. 6』、(財) アジア女性交流・研究フォーラム、26-29。
- Fuglesang, Andreas and Chandler, Dale (1993) *Participation As Process: Process As Growth*, Dhaka: Grameen Trust, 103-104.
- Gibbons, David S. (1994) *The Grameen Reader: Training Materials for the International Replication of the Grameen Bank Financial System for Reduction of Rural Poverty*, Dhaka: Grameen Bank, 141-143.
- Grameen Bank (1984-2002) *Annual Report 1983-2001*, Dhaka: Grameen Bank, 1-2.
- Grameen Trust (1998) *Grameen Dialogue No.36 October 1998*, Dhaka: Grameen Trust.
- Hossain, Mahabub (1988) *Credit for Alleviation of Rural Poverty: The Grameen Bank in Bangladesh*. Research Report No.65, Dhaka: International Food Policy Research Institute in collaboration with the Bangladesh Institute of Development Studies, 33-34.
- Khandker, Shahidur R., Khalily, M. A. Baqui and Khan, Zahed H. (1996) *Credit Programs for the Poor: Household and Intra-household Impacts and Program Sustainability*, Dhaka: The Bangladesh Institute of Development Studies and the World Bank, 39-40.
- Yunus, Muhammad and Jolis, Alan (1998) *Banker to the Poor*, Dhaka: The University Press Limited, 109.
- Yunus, Muhammad (2002) *Grameen Bank II: Designed to Open New Possibilities*, Dhaka: Grameen Bank.